

入来新能



鹿兒島に帰って、先ずその自然の豊かさに驚いた。屋久島や霧島は言うまでもないが、我が住まいのある入来町も、町を貫く清色川の風情や、愛宕山からの俯瞰などもなかなかのものである。そして中世を思わせる素朴な玉石垣の武家屋敷群のある街並みは、入来ならではの歴史的な景観と言える。

しかし住んでいる町民には、昔ながらの何も珍しいものではないから、その価値が分からないらしい。

ただ見る人が見れば、大切にすべき場所であることは明白で、伝統的建造物の指定や国指定の史跡にと積極的に運動して下さっている権威のある学者の方々も存在する。その熱意が、いずれ町民の眼を開かせてくれることと期待している。

一昨年は、関東から渋谷一族の五兄弟が、地頭としてはるばるこの地に下向して七百五十年に当たるといふことだった。それぞれ居住した地名をとって東郷、祁答院、鶴田、入来院、高城を名乗ったが、その中でも入来院は明治まで存続した。

私は、七百五十年という一つの節目に五兄弟の末裔の方々とそれを記念する催しを行いたいと思った。それで歴史のお好きな方々も交えて、郷土史にお詳しい先生を招いて渋谷氏に関する講演を聞いた後、それぞれの拠点を巡り、祖先を偲びながらこの小さな町に注目してもらつという催しを企画した。全国的に呼びかけるといふことで行政の協力を得たいと思った。

ところが驚いたことに、この町で行われる行事は、

全て町が計画するものであった。民間の企画した僅しに行政が協力するということは「前例がない」ということである。協力すれば「前例となってしまう」ということで後ずさりされてしまつたのだ。

講演、昼食、バスでの史跡巡り、夜の懇親会と全て含めて一円円の会費としたが、役場では「こんな山の中に一円円も払つて来る人はいない」という反応だった。しかし何とか説得して、講演会場に町の文化ホールを使わせてもらうこと、散策のとき教育委員会に町の歴史を説明してもらうという協力をとりつけた。課長の何人かも加わってくれた。

結果は大成功で、二百余名、渋谷氏の末裔の方々や歴史愛好家が遠くは千葉、神奈川、京都、福岡、熊本からも集まつて、大型バス三台に町のマイクロバス二台が連なつて川内川の流域を駆けめぐり、夜の懇親会場「いこいの村いむた池」の宴会場は溢れるばかりの賑わいであった。

鹿児島短期大学学長三木靖先生の講演は、渋谷氏が関東を出発するところまでで時間となつてしまつ

たので、今後毎年講演会を継続してほしいという要望が強かつた。私は来年は何を付録に企画しようかと思索した。

ある集会での会話で一人の県議が「鹿児島には能楽堂がない」と言った。私は城跡で新能はどつだらうと思いついた。天佑というべきか、私たちが東京で謡曲を教えて頂いていた無形重要文化財認定保持の若松健史先生が長崎の諏訪神社で新能をなさるといふ。

私は早速先生に、入来の清色城址が能の会場たりえるか下見してほしいとお願いした。日帰りの行程は無理なので、二日続いてお休みの取れる先生の貴重なたった一回の機会を頂いて、晩秋の一日、入来をご案内した。

清色城は山城で、江戸時代の仮屋敷跡は今小学校になつている。先生は、霽気は申し分ないし、千五百人くらいは入れるだろうとおっしゃる。早速夏休みの先生の空いている日を開催日と決めて、具体的に計画を立てることにした。

渋谷氏の催しとは異なり、先生へのギャラや交通費、舞台の作成など費用は気の遠くなるほどのものだが、そこは素手で霧ヶ峯に昭和寺を建立した父譲りの無謀さを持ち合わせている私のこと。夫の易占いもGOだということで、エイツと一歩踏み出したのだった。

バブル期に三回ほど新能を催したデパート山形屋の全面的な協力や、地元の各種青年会の代表を組織した支援会が結成されて、新聞にも報道され、テレビにも出たりと意気も上がって来た。講演と付録が逆転した。

昨年は雨続きの夏で、天候が心配された。それが奇跡的に午後から晴れ、城前には炎暑の中を三時間も前から列が出来た。夕暮れ、山に帰る白鷺の群が頭上を行き、すだく虫の音、さしのぼる満月と雰囲気は満点。観衆も伝統芸能の迫力に感銘して大成功だった。

何よりも千名を超える観衆が城跡に集まったのは町始まって以来のこと。来年も案内をとという方の記

名も二百名を越えた。町長選の敗戦で大分くたびれた私だったが、「継続が力だ」とつ励ましもあり、今年も頑張って八月十九日に開催する運びである。今年は何が原から四百年。島津義弘ブームだが、兄義久、弟歳久の三兄弟の母は、入来院十一代重聡の娘で、太守貴久の妻雪窓夫人である。彼らの冥福を祈って今年の篝火を焚く。



